

Aya Ezawa

『*Single Mothers in Contemporary Japan : Motherhood, Class, and Reproductive Practice*』

評者：田宮 遊子

1 なぜシングルマザーが分析の対象となるのか

本書は、シングルマザーのライフ・ヒストリーをもとに、社会階層とその不平等、階層移動を分析している。

社会階層の差異は、父親の職業と所得からのみ規定されるのではなく、何を買い食べるのかといった生活様式の実践と実践、専業主婦になるか否かといったライフ・コースについての志向性によっても規定されるという立場に著者は立っている。なかでも、子どもへのしつけや教育期待を含む育児とは、文化資本を示すものであり、また、階層を再生産するものでもあるという。

なぜ本書はシングルマザーを分析対象にするのか。シングルマザーとなることは多くの場合社会経済的地位の下方移動を伴い、その新たな状況への適応が必要となる。それは、女性のジェンダー・アイデンティティやライフ・コースがどのように再構成／維持されるかの過程であり、社会階層のダイナミクスを知る手がかりとなるものだという。これらのことから、シングルマザーは階層研究にとって重要な視点を提供する存在であると著者は位置づける。

本書は、仕事や育児を含めた日々の生活の選

択と実践に着目し、それらを描写する方法として、ライフ・ヒストリーをききとる質的調査の手法を採用している。主要なインタビューは1998年から2000年にかけて行われ、そのうちの一部に対し、追跡調査が実施されている(2004年から2005年の間)。インタビューの対象は、初回のインタビュー時に就学前の子どものいるシングルマザーに焦点化されており、インタビュー総数は、59人となっている。

2 本書の概要

まず、本書の構成をみていこう。第1章(“Single Mothers and the Postwar Japanese Family”)では、戦後日本において、サラリーマンと専業主婦を標準家族とする規範が社会政策や雇用慣行を通して形成された経緯が概観される。有配偶中流の家事専業の母親が特権化されることで、配偶者がおらず、低所得のために中流並みの生活ができないシングルマザーが、差異化、周縁化されたとしている。

第2章(“Education Pioneers”)、第3章(“The Bubble Generation”)は、シングルマザーの世代差に焦点をあて、バブル前世代(1959年以前生まれ)とバブル世代(1960年以降生まれ)の違いが分析される。バブル前世代のシングルマザーは、社会変革と階層移動が可能となった戦後社会のなかで、教育達成や新たな雇用機会の拡大により、父親とは異なる階層への移動が可能であり、また、より平等な婚姻関係を求めた世代であったという。一方、バブル世代のシングルマザーは、労働の場で報いが得られない分、結婚して母親になることがより望ましい選択として意識されているという。

第4章(“Becoming a Single Mother”)は、シングルマザーの仕事と育児をめぐる諸問題が分析される。シングルマザーの仕事と育児の両立の困難そのものを描写するよりも、本書で

は、標準家族規範に従い、結婚後に家事専門の妻・母になり、就労を中断することこそが、中流の生活を失う、あるいは、その水準に到達できない原因であることが強調される。

第5章(“Motherhood and Class”)では、シングルマザーの母親役割、母親としてのアイデンティティと社会階層について分析されている。

3 シングルマザーの就業選択と子どもへの教育期待

評者がとくに注目したのは、本書第5章後半部の3人のシングルマザーを軸とした分析である。ここでは、出身階層、教育歴と、各自が持つ母親規範によって、選択するライフ・コース、子どもへの教育が異なっているさまを描き出している。中流家庭出身で大卒のタナカ、ヤマモトと、ブルーカラーの両親をもつ高卒のキムラという、帰属する階層が異なるシングルマザー3人であるが、専業主婦規範は出身階層にかかわらずひろく女性たちに浸透しており、それが低所得をもたらしている可能性がある。他方で子どもに対する教育期待や教育投資の質と量は、シングルマザーの出身階層による差がみられる。

やや詳しく本章の事例をみていこう。

大卒のタナカ、高卒のキムラは、パートタイム就労に従事している。両者はともに、フルタイムでの仕事を探しているがやむなくパートタイムで働いている、という状態ではなく、あえてパート就労を選択している。教職についているタナカは、常勤ポストへの転換は可能であるものの、残業などで子どもと過ごす時間が短くなることを避けるために非常勤を選択している。タナカは、賃金面ではフルタイム教員よりも劣る非常勤をあえて選択することで、子どもとの時間を確保する一方、離婚前からの中流の

生活は維持できない所得水準であることが、著者のインタビュー時のお茶と茶菓子のエピソードから説明されている。タナカと同じく、キムラも主婦志向が強い。彼女は、児童扶養手当の受給額を最大にする範囲(年収130万円未満)のパート就労にあえてとどめていたが、ついにはパート就労を自発的に辞めるに至る。子どもと共に過ごす時間やPTA活動に従事する時間を確保するためだという。シングルマザーが母親として子どもと過ごすことを重視したならば、世帯の所得水準を低位にとどめる結果がもたらされる。専業主婦志向は世帯の経済的安定さえ犠牲にするほど、シングルマザーの働き方に強い影響を与えている。

他方、タナカと同じく大卒のヤマモトは、正社員として長時間労働をいとわない働き方をすることで高収入を維持している。家事や育児に関しては高額な外部サービスを購入している。タナカが重視しているのは子どもに対して将来にわたり高水準の教育機会を保証することであり、シングルマザーとして彼女が選択している役割は、稼ぎ手としてのものである。母親役割はまったく重視されていない。

子どもへの教育について、ヤマモトは、子どもの将来にわたる教育水準を高めることを最大の関心事とし、水泳教室、絵画教室やピアノ教室にも通わせ、情操教育にも余念がない。調停離婚をした際に、子どもが大学を卒業するまでの養育費を前夫が支払う取り決めもしている。タナカも、子どもの将来の学歴達成を重視しており、今後の学校選択についても考えている。ヤマモトに比べれば経済的な余裕はないタナカであるが、子どもの塾通いには優先的に支出をしている。他方で、タナカと同じく専業主婦志向の強いキムラであるが、子どもの教育機会や教育の質については特段の関心をよせていない。子どもが学校から帰ってきた時に家にいて

あげて、おやつを食べながら子どもと話しをすることこそが、子どもに対して最もしてあげたい母親役割であるという。

4 福祉の罫と専業主婦志向

階層論を主軸にした著者の分析視点からは逸脱してしまうかもしれないが、ひとり親世帯の貧困に関心を寄せる評者の立場からは、3人のライフ・ヒストリーを次のように読み取った。

まず、著者はそのように定義づけしていないものの、キムラの例は、「福祉の罫」の例にあてはまるようにみえる。福祉受給額を最大化するために意識的に就労を抑制しているキムラの年収は明示されていないが、児童扶養手当を含めても貧困線を下回ると推測される。しかも、子どもへの教育期待は低い。

タナカ、ヤマモトはともに母子世帯であることについてのスティグマを感じ、職場ではシングルマザーであることを数年間隠していた。他方でキムラは、離別したことを周囲に隠すことなく直ちに伝えることで、母子世帯として利用できる公的なサービスに関する口コミ情報を収集する。公営住宅に住み、児童扶養手当を受給し、節約に努める生活に、満足感を得ている。

キムラの例からは、経済的貧困や貧困文化が再生産される可能性がうかがえる。ただし、キムラが仕事を辞めた理由は、子どもが学校から帰った時におかえりと迎える母でありたいという思いを実現するためであった。福祉が受けられるから働かないのではなく、専業主婦志向の遂行のために福祉を受給するという状態は、欧米の福祉依存の議論ではあまり目にしないシングルマザー像として注目できよう。

5 シングルマザーの2つの極

キムラと対照的な位置にあるのが、ヤマモトではないだろうか。彼女は主婦役割を担わない

ことを選択し、離婚前は夫がある程度それらを引き受けていた。離婚後は、仕事のパフォーマンスを維持して高収入を確保するかわりに、家事や保育は外部サービスを購入している。経済的安定を確保し、それを惜しみなく子どもの教育に投資している。専業主婦的母親役割を遂行することで経済的安定を犠牲にするキムラと、高収入を得ることのかわりに、主婦役割は一切外部化するヤマモトとは、まさに対極の関係にある。

実際のところ、日本のシングルマザーは、その多数がこの両極（キムラとヤマモト）の間に位置しているのではないか。主婦役割を外部化するに十分な賃金を得る仕事に就けているのではなく、主婦志向のためにあえて非常勤職にとどまっているのでもない。安定した雇用機会を得るために日々格闘するも、育児中の女性は日本的雇用慣行の壁に阻まれて安定雇用には就くことができない。こうした状況は本書第4章で分析されている。

6 仕事と育児

第4章では、シングルマザーの直面する困難をもたらす要因が、結婚や出産による就労の中断、仕事と育児が両立できない職場環境、および、シングルマザー自身の専業主婦志向にあると結論づけられている。これらの論点は、シングルマザーのみならず、日本におけるワーキングマザー全般に当てはまる、ほぼ異論の余地のない事実認識であろう。

むしろ、評者は上記に当てはまらない非典型事例のほうに興味をもった。各種調査や研究で明らかにされている平均像を再確認するだけでなく、平均像と個別事例との溝をうめるミクロな視点は、質的調査の得意とするところであろう。例えば、本章のタケザワのケースでは、常勤職として20年間継続勤務したうえで出産し、

無給の（なぜ出産手当金を受給していないのかについて、本文での説明は無い）産前産後休業のち、母親の育児支援を受けながら就労を継続していた。就労の中断は免れ、出産後も就労を継続していたにもかかわらず、タケザワは結局離職を選択することになる。彼女の場合、育児を支えていた母親の死、長い通勤時間、時間外の保育サービスの費用負担の3つの障壁が就労の継続を断念させる要因と分析されている。

ただし本書の分析は、就労と育児をめぐるシングルマザーの分析としては、やや新規性に乏しい印象を受けた。シングルマザーの社会階層により焦点をあてた第5章の分析が評者にとってはとくに興味深い分析であった。稲葉昭英は、これまでの世代間移動研究が「父のいない」人たちを分析の対象から外してきたことで、それが『社会全体』ではなく、『長期間家族を形成することが可能であった人たち』についての研究であったかもしれないと述べている（稲葉 2011：p.251）。社会階層がどのように子どもに引き継がれるのか、これまでの日本の階層研究がふたり親を暗黙裡に前提としていたのであれば、シングルマザーを分析の対象とした本書はどのような貢献をなし得ているのだろうか。階層論に明るくない評者には手に余る論点であり、識者の見解を待ちたい。

7 インタビュー対象者についての案内

最後に、質的調査の分析とその結果の記述方法について2点書き添えたい。

まず、本書を通読して、インタビュー対象者個々人の全貌がつかみにくいと感じた。

読者として、本書で言及されているシングルマザー個人の基本属性がつかめずに、著者の分

析を読むこととなる箇所が少なからずあった。各人の基本属性（例えば、離別か未婚か、本人年齢、子どもの数や年齢、所得水準等）の情報が各章に分散していたり、そもそも記載のないケースもみられた。著者が着目する出身階層や教育歴についての情報に限定された形での人物理解を促されるのでは、著者の仮説に沿うようにエピソードが切り抜かれているかのような印象を与えかねないのではないかと。

また、著者は59人にのぼるシングルマザーへのインタビューを実施しているが、本書でとりあげられているのは、35人程度となっている。インタビュー対象者全体のうち、どのような基準で選別された結果、分析が行われているのだろうか。量的調査の場合、外れ値は除く場合があるものの、それ以外の全サンプルを用いて仮説を検証することになる。質的調査においても仮説検証の客観性を担保するために、分析から落とされたケースも含め、全サンプルの基本的な情報は掲載すべきではないだろうか。

あわせて、インタビュー対象者の登場箇所を巻末索引に掲載するなど、1人のシングルマザーが複数の章で登場する場合にインデックスでたどれるようにすれば、なおのこと読者の理解が容易になるのではないかと。

(Aya Ezawa, *Single Mothers in Contemporary Japan: Motherhood, Class, and Reproductive Practice*, Lexington Books, May 2016, xxv + 129p, \$80.00)

(たみや・ゆうこ 神戸学院大学経済学部准教授)

【引用文献】

稲葉昭英 (2011) 「ひとり親家庭における子どもの教育達成」佐藤嘉倫・尾嶋史章編『現代の階層社会 1——格差と多様性』東京大学出版会。